

**43rd International Annual IATEFL Conference and Exhibition, Aberdeen, UK  
31st March-4th April 2009**

**大会参加報告**

笹島茂 (埼玉医科大学)

今大会は、ウェールズのカーディフで3月31日(火)から4月4日(土)までの5日間行われた。3月31日はPre-Conference Events (PCE)と Associates' Dayがあり、前日の30日(月)にはSVA Dinnerが開かれた。大会の公式発表ではないが、参加総数が延べ2100人、発表件数が約500と聞いた。例年の通りであるが、様々な国の英語教育の状況の一端が理解できる実践的な内容が多く、各出版社等の展示も盛況であった。

大会の概要は下記の通りである。

3月31日(火) Pre-Conference Events (PCE)、Associates' Day

4月1日(水) 第1日目 8:30~18:35

Plenary Session Marc Prensky

Elana Shohamy

4月2日(木) 第2日目 8:30~18:25

Plenary Session Bonny Norton

Fauzia Shamim

4月3日(金) 第3日目 8:30~18:25

各発表

4月4日(土) 第4日目 9:00~11:30

Symposiums

Plenary Session Claudia Ferradas

これらの内容は、例年のことながら British Council の協力によりウェブサイト  
で知ることができるようになっている。参加者には、英語教育の実践に携わる  
人と研究に携わる人がバランスよく混じり合っており、双方のニーズを満たす  
ようによく工夫された大会という印象を感じる。今回の特徴は、plenary speaker  
に集中することなく様々な話題を多く提供したことだったように考える。ある

面では物足りなさを感じるが、これも参加者のニーズに対応した結果だろう。ここでは私が参加した発表のいくつかの感想を述べることに留めたい。

### **Associates' Day** について

前日のパーティから参加し、多くの人と交流できたことは実り多いものがあった。Associates' Day には約 40 名の各 TA (Teacher Association) の代表などが参加し、いくつかの活動報告があった。特に、British Council による Online conference の様子などの紹介、会員の確保、運営費用、TA 相互の連携などが、話題として目立った。日本の印象としては、JACET よりも JALT の活動の認知度が高かった。やはり、英語による活動割合を高くしないと多くの TA との連携はむずかしいのかもしれない。IATEFL の様々な活動を JACET は共有していないのが現状である。IATEFL と提携を結ぶ意味をある程度見直す時期にあるのではないかという印象を持った。次年度から IATEFL Associates' representative は Sara Hannam から Les Kirkham に代わる。

### **Plenary Sessions** について

初日は、Marc Prensky と Elana Shohamy の二人が同時帯に行った。迷った末に、Shohamy の話を聞いた。タイトルは、'Language teachers as active and critical partners in creating and negotiating language policies' である。教師も言語政策にかかわるべきという主旨の話だった。確かに、教師は目の前の授業にだけに関心が向くが、どのような言語教育の背景にも政策は必ずある。イスラエルという国の状況からすれば説得力のある内容だった。言語政策にはどちらかと言えば疎い日本の英語教師であるが、言語政策などについてももっと考える必要があるのかもしれないと考えた。二日目の Plenary は Bonny Norton と Fauzia Shamim だった。私は Shamim を選んだ。パキスタンを中心として活躍している人で、タイトルが 'Teaching and researching in large classes' だったので興味を持った。クラスサイズは小さい方がよいという定説に対して異を唱える内容である。多くの国や地域では教育に対する予算が限られている。どの程度の生徒の人数が授業で適当かは簡単な問題ではない。事実、日本はクラスサイズが大きくても実績を残してきた。いまだにクラスサイズは大きいほうである。教員養成にかかる費用などを考えると日本はかなり効果的な英語指導法を実践してきたのかもしれないと話を聞きながら考えた。もう一つの Plenary session は Claudia Ferradas だ

ったが、残念ながら都合でこれには参加できなかった。

### その他の印象に残った点

IATEFL の大会の魅力は、やはり、その実践的で多面的な英語教育に対する視点であろう。理論的な内容から明日の授業で使える内容まで、また、体系的な研究に基づく発表から素人的な発表まで、多種多様である。さらに、教材展示やオンラインによるネットワーク化など、ただ単に研究ばかりではなく、ビジネスと密接に繋がる方針が実にプラグマティックである。

個人的には、教員研修、ESP と CLIL (Content and Language Integrated Learning) に興味があったので、関連の発表に参加した。Richard Alexander の‘Content matters in ESP’は ESP の内容に関する発表であったが、CLIL と相通ずる点があることが分かった。Annette Capel の‘Making sense of words: the English Profile Wordlists project’の発表では、語彙が CEFR の 6 レベルに対応して分類されているのを見て驚いた。随分とプロジェクトが進んでいる。Alastair Pearson の‘What inspection tells us about ESOL’は、イングランドに多くなっている移民などの学習者への英語教育の査察をもとに教師の質の低下の報告があった。David Crystal は‘Keeping your head in the clouds of language change’と題して LDOCE 第 5 版の辞書について話をした。Macmillan Education in association with Guardian Weekly and OnestopEnglish signature event として行われた ‘CLIL: Complementing or Compromising English Language Teaching’ と題したディベートは、CLIL の可能性についての議論をした。CLIL の普及を推進しようとする趣旨の内容であった。

### 個人の発表とまとめ

この他にも多くの発表があったことは言うまでもない。私が見過ごしたすばらしい発表もあったことと思う。いずれにしてもどの大会でもそうであるが、同じような関心を持つ人との出会いは貴重である。今回の私の発表は、Aspects of EFL teacher cognition identified through interviews and observations と題したもので、教師認知を扱った内容である。熱心に質問してくれた方もいた。

今回で IATEFL の大会に参加するのは 3 回目であるが、この 3 年間に多くの人と出会えたことが最大の財産である。発表内容もさることながら、IATEFL を推進する人の力が最も魅力的な大会という印象を受けている。英語教育の実践に関心のある方はぜひ次回参加してほしい。次回は Harrogate で 4 月 7-11 日。